

書評

國分功一郎著

『暇と退屈の倫理学』

(朝日出版社、2011年)

佐藤 岳 詩

本書は様々な思想家の「退屈」論に独自の分析を加え、最終的に一つの「生き方」を提示する倫理学の書である。筆者曰く、「こうして、暇のなかでいかに生きるべきか、退屈とどう向き合うべきか」という問いがあらわれる。〈暇と退屈の倫理学〉が問いたいのはこの問いである」(p. 24)。

本書の構成は以下である。第一章「暇と退屈の原理論」では、パスカルらの議論をもとに、人間が退屈に耐えられず気晴らしを求めだす様が描かれる。第二章「暇と退屈の系譜学」では、退屈の起源が論じられ、人類が遊動生活を止めた定住革命によって、それまで探索に使われていた能力が持て余され、退屈が生じたという仮説が提示される。第三章と第四章では、「暇」の分析、「消費」と「浪費」の区別などをもとに、主に経済史的観点から現代の消費文明に批判的な考察が加えられる。第五章から第七章は主に退屈の哲学的考察の章である。そこではハイデッガーの退屈の三形式を退屈の分析として妥当とした上で、ユクスウェルの環世界論を巡ってのハイデッガー批判、自由と決断を巡ってのハイデッガー批判によって、彼の立場を乗り越えることが目指される。ハイデッガーがあくまで退屈と対決する姿勢をとり続けるのに対し、筆者は退屈と気晴らしが絡み合った生を生きるものこそが人間であると考え、そのために最後に掲げられる、冒頭の問いに対する答えは、退屈と気晴らしの中を生きながらも「人間であることを楽しみ、動物になることを待ち構える」ことである。

本書の特徴は何をおいても、ハイデッガーの『形而上学の根本諸概念』を中心とした退屈論というユニークなテーマ設定、そして哲学的にハードな議論を中心におきながらも、全体を通して極めて平易な文体で、しかも力強く魅力的な表現を貫徹した点があげられるだろう。また「退屈」という一つのテーマによって、哲学はおろか経済史、文

明論にも言及し、数万年前の遊動時代から現代消費社会に至る人類史をダイナミックに捉え直す大胆な筆致は、単なる説得力の有無を超えてドラマチックな迫力をもったものとなっている。結論部で示される一つの生き方は、現代に生きる多くの読者にとっての指針となりうるものだろう。アカデミックな観点からも、ハイデッガー論として、近代理性主義批判として、あるいは近年、心理学の分野において論じられているフロー論などを思い起こさせるものとして、非常に興味深い論点をいくつも含んでいる。

もちろん難点もある。たとえば本書では価値論や幸福論が扱われないため、善悪などの価値や幸福の在り方についてやや乱暴な記述が見られる。たとえば、第一章で、ラッセルやスヴェンセンを批判する際に、筆者は「不幸への憧れを抱いてはならない」、「高望みをやめて諦めるという主張は受け容れられない」と主張する。しかしながら、なぜ不幸に憧れてはならないのかは明確ではなく、また「諦観」という古代から人類が真剣に検討してきた態度を「お前はいま自分のいる場所で満足しろ」という主張にやすやすと読み替えてしまうことには問題があるだろう。ハイデッガー批判についても、決断を行った後の人間のことをハイデッガーは忘れているという筆者の分析は極めて鋭いものであるが、そこからの、決断を行った人間があたかも常に決断の奴隷となるかのような記述には違和感がある。決断は一度きりのものとは限らず、過去の決断を反省する能力もまた我々にはあるはずであろう。

その他にも定住革命による能力の余剰と環世界間移動能力とのつながりなど、疑問点は尽きない。しかしながら、こうした点は本書に相対した読者がまさに「楽しみ」ながら自らの生活に照らして考えていけば良い点である。そうして筆者の力強い文章に心を動かされ、「とりさらわれる」中で、己の退屈と向き合ってみることもまた時に必要なことであるのではないだろうか。